

器楽基礎（クラシックギター）の短期習得における 達成感の重要性と効果、および実践的研究

橋 爪 皓 佐
(教育学科非常勤講師)

楽器の演奏など、実技的な技術を習得する過程において、達成感を継続的に得ることは、モチベーションの維持に必要不可欠なものである。クラシックギターは、一人で音楽を奏でることができる和声楽器であるが、初心者が和音や多声音楽の演奏の練習から取り組み始めると、難易度が高い楽器であるという認識を持ってしまう。教育現場での短期間の習得においては、易しい課題を積み上げ、達成感を得ながら基本的な技術を学習することで、難しい楽器だという認識を持たずに、モチベーションを維持しながら学ぶことが可能だと考え、クラシックギターのグループレッスンに適した最初期の教材を作成し、それを活用して講義を行った京都女子大学「器楽基礎Ⅰ」における実践とその結果及び考察について述べる。

キーワード：クラシックギター、器楽基礎、教授法、グループレッスン、短期習得

1. はじめに

クラシックギターの演奏は、左右の手の役割が全く異なり、スチールギターやエレクトリックギターのようにピックを用いないため、押弦する左手のみならず、右手も多くの指を独立して動かす必要がある。そのため、初学者が思いのまま演奏することが比較的難しい楽器である。どんな楽器の演奏技術を習得する過程においても、成功体験は必要不可欠なものであるが、クラシックギターは、一人で音楽を奏でることができる和声楽器であるため、中高の授業や大学の講義など、短期間での習得を余儀無くされる場合に、難易度の高い楽曲を課題として設定すると、難しい楽器であるという意識を植えつけてしまうことになる。本論では、以上の課題をふまえ、クラシックギターの奏法を短期間で効果的かつ確実に身につけさせるために制作した教材と、その教材を用いた本学発達教育学部音楽教育学専攻の講義「器楽基礎Ⅰ」での実践を通して研究した結果と、今後の課題について述べる。

2. 器楽基礎Ⅰについて

本学発達教育学部音楽教育学専攻の必修科目である「器楽基礎Ⅰ」は、30名超の受講生全体を4グループに分け、鍵盤楽器・リコーダー・ギター・和楽器の4つの楽器を、それぞれ4回ずつの講義でローテーションしながら学んでいく形をとっている。シラバスでは「リコーダー・ギター・和楽器の実習では、それぞれの楽器を実際に扱い、楽器の仕組みを理解したうえで、基礎的な奏法や表現法、指導法を身につけていく。また、合奏の形態をとることで、アンサンブル能力を同時に養うこともねらいとする。各セクションにおいて、最終講義時（4回目）に理解度や到達度を見るテストを行い、また、演奏発表も随時行っていく。」とされており、ギター実習に関しては以下の4つの講義から構成されている。

1. 楽器の歴史・扱い方・構え方や姿勢・各種奏法・ハ長調音階について
2. 単音によるアンサンブル
3. アルペジオ・和音の弾き方・試験曲の解説

4. これまでのまとめと復習・実技試験

2022年度から本講義を担当するにあたり、同講義の前任者の取り組みを研究したうえで、到達目標のレベルは保ち、音楽的な完成度に重点を置きながら、シンプルなエクササイズやエチュードをとおして、簡単に演奏が出来るという成功体験を繰り返すことで、強い達成感を感じながら演奏技術の習得ができることを狙って、教材を制作した。次項では、既存のギター用メソッドやエチュードを紹介し、それらがいかに優れていたとしても、本講義で使用する事が難しい理由を交えながら論ずる。

3. ギターメソッドの昨今

ギターは、初学者にとって決して簡単に演奏できる楽器ではないが、持ち運びが容易で、和音が奏でられることもあり、世界中の様々な音楽分野で愛奏されている。その源流である中東のウードは、世界中に広がり、様々な発展を遂げ世界中で定着しており、ヨーロッパにおけるリュート属の楽器に限っても、ルネッサンスの時代から、絵画でたびたび取り上げられ、古くから楽譜が流通していたことから、その人気の普遍性をうかがい知ることができる。

そのため、ギター関連の教則本の歴史は古く、17世紀頃には、スペインのガスパル・サンス Gaspar Sanz(1640-1710)をはじめとする、多くのギタリストによる教則本が出版され、広くヨーロッパで流通した。その後ギターが現在の形に近くなった19世紀には、マッテオ・カルカッシ Matteo Carcassi(1792-1853)によるメソッドが出版された。このメソッドは、解説を加えた複数の編著の日本語版が出版されており、現在も広く流通している。カルカッシのメソッドの特徴としては、ハ長調から順に、各長のスケール、カデンツァなどを順に練習していく形式となっており、端正に作られたエチュードの数々が特徴的で、演奏技術と共にクラシック音楽の基礎を学ぶことにも適した教材である。

その後、近代的な奏法を広めたフランス

コ・タレガ Francisco Tárrega(1852-1909)は、メソッドは残していないが、その弟子であるエミリオ・プジョル Emilio Pujol(1886-1980)がタレガの奏法に関してまとめ、スペイン語、フランス語で記された *Escuela razonada de la guitarra*(1934)を出版している。こちらは全4巻にも及ぶ詳細なメソッドで、歴史などを説明した第一巻の他、第二巻からは初心者が漸進的に学べるエチュードが、詳細な解説とともに掲載されている。

カルカッシのメソッドが、ギターの技術的な面と、音楽そのものの知識を並行して学ぶ形式であるため、最初期の段階から音楽的要素に妥協がなく、難易度は低くない。それに対し、ブホールのメソッドでは、右手のみの訓練からスタートし、徐々に左手を加える形式となっていて、容易に取り組める内容となっている。ところが、左手を使う段階になると、急激に難易度が高くなっていくなど、一つ一つのエクササイズをしっかりと習得しなければ次の段階へ進むことが難しい作りとなっている。

より近代の例をあげると、2016年に出版されたスタンリー・イエーツ Stanley Yates(1946-)による教則本でも、右手のテクニックの導入を入念に行う作りとなっており、左手の動作が出てくるまでに、基本の動作を習得することにかかる時間をかけることになる。一度正しくない姿勢や奏法が習慣づいてから修正するのは困難を伴うため、これらのメソッドは基礎の部分に重きをおいており、理想的な学び方を推奨していると言える。

しかし逆説的に言えば、例に挙げた既存メソッドでは、習得に対する強い意欲が要求され、地道な努力によって基礎的な力をしっかりとつけながら上達することを前提として制作されているため、当然ながら、音楽の授業でギターを初めて手に取る中高生や、教員を目指す学生が、短期間である最低限の演奏技術の習得を目指す場合には、活用がしにくい。

筆者はギター演奏のほか、作曲を専門としているため、既存のメソッドとは違った形で、初学者が飽きず、諦めず、そして必ず達成可能な

形で課題を設定するために、講義に先立って教材を作成した。教材に含まれる練習用課題に関して、以下、「エクササイズ」を簡易的な指の体操、「エチュード」をより音楽的な作品に近いものと定義するが、エクササイズにおいても単純な指の運動ではなく、音楽性を持った音節となるよう心がけて制作した。また開放弦を連打するなど、音を出すだけの純粋なエクササイズにとどまるものは、楽譜化せず口頭で説明することとした。これは練習時に楽譜を見ることで動作に対する意識を減衰させないためである。次項では、作成した教材を紹介しながら、4グループに対して4度繰り返し行った講義の実

践について述べる。

4. 制作した教材と講義における実践

4-1 第一回

導入部にあたる第一回の講義では、ギターの歴史と楽器の構造や各部の名称のほか、運指など記譜に関する説明を行ったあと、実際にギターを手に取り、姿勢や右手の演奏方法などを口頭で説明し、まずは楽譜を使わず、右手のみで弦を弾く練習を行った。その後、以下の教材に取り組んだ。

図1 第一回配布課題 エクササイズ 1-5

① 3弦を弾いてみよう 開放弦と左手中指(=2)



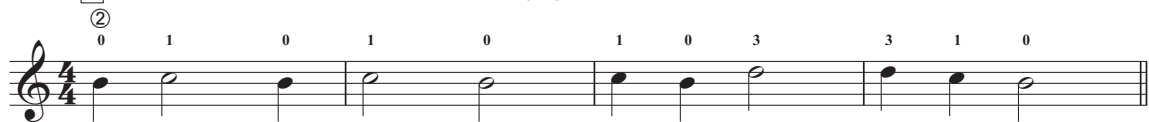
② 4弦を弾いてみよう 開放弦と左手薬指(=3)



③ 3弦と4弦を弾いてみよう



④ 2弦を弾いてみよう 開放弦、左手人差し指(=1)と薬指



⑤ 2~4弦を弾いてみよう

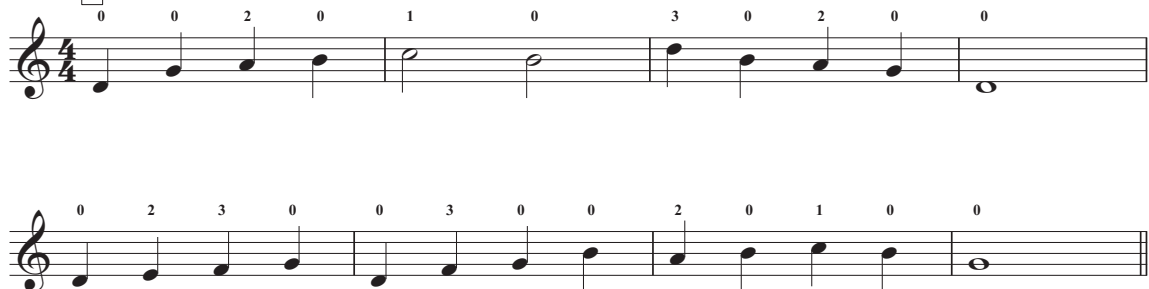


図1のエクササイズ①、②では、単弦のみを扱う。右手はimで、左手はそれぞれ一本の指にフォーカスして、開放弦と組み合わせた2音のみで演奏を行う。二つのエクササイズで、それぞれ別の一指を用いることで、全く同じ動きを別の指で練習する形になる。似たようなエクササイズを繰り返すことで難易度を下げた。全体を通し、一つ一つのエクササイズを簡潔に、簡単にすることで、失敗を繰り返さないような課題作りを心がけた。また、多くの教則本では、ネックの端にある1弦の開放弦を演奏することが最初の課題となっているが、本エクササイズでは、中心部に

張られている3弦、4弦からスタートすることで、ギターに初めて触れる時から、右手や左手のポジションを適切に構えることを意識できるようにした。エクササイズ③では、弦の移動を練習するが、左手のポジションは①と②を踏襲しているため、これらはワンセットになっている。

エクササイズ④は、新たな弦と、新たな左手の指を使用し、リズムパターンも変わり、様々な点で注意が必要となる。続くエクササイズ⑤は、単弦で演奏するテクニックを総合したもので、よりエチュードに近いものとなっている。

図2 第一回配布課題 エクササイズ6、7

⑥ 5弦を弾いてみよう

⑦ 1弦を弾いてみよう

エクササイズ⑥、⑦は新たな弦をそれぞれ練習するものである。1弦と5弦はかなり離れているため、左右両方の手が、弦が変わるにつれ無理な姿勢や極端に偏ったポジションをとっ

てしまうケースが多いため、この時点で正しい手の形を意識的に覚えるよう、指導を行った。

エクササイズ⑧はハ長調のスケールで、試験課題の一つでもある。

図3 第一回配布課題 エクササイズ8、9

⑧ ハ長調のスケールを弾いてみよう(運指も書き込んでみよう)

⑨ 低音でハ長調のスケールを弾いてみよう(運指も書き込んでみよう)

開放弦を使う第一ポジションでは、最も独立して動かすことが困難な左手小指を用いずに演奏できるのは、ハ長調とヘ長調のスケールである。初心者への導入としてより適しているハ長調を試験課題、また練習題材として選んだ。運指を自分で書き込む作りになることで、指番号の定着を計った。ピアノ譜に慣れている学生にとっては、指番号が一つずつずれるため、その点を繰り返し説明した。そのほかに、この段階では1～3フレットをそれぞれ1～3の指で押弦することを徹底し、個別にチェックをしてまわるよう心がけた。これは左手のポジションを安定させる助けとなる。また、同様に右手の運指 im の名称を浸透させるよう心がけた。短期間での演奏技術習得においては、初期段階から用語を繰り返し説明することで早期定着を目指すことが重要であった。

以上のエクササイズは、ほとんど全員が問題なく演奏することができ、達成感を積み重ねるという点では試みが成功したと言える。この段階でまだ上手く弾けていないと感じている学生に対しては、すでになりに上達していることを繰り返し説明することで、モチベーションの確保に努めた。

4-2 第二回

第一回の振り返りを行ったあと、新たな課題としてエクササイズ⁹（図3）低音域のハ長調のスケールに取り組んだ。ここで右手親指の奏法を導入した。親指は、アルアイレ奏法のみに取り組み、この後に導入を行う和音（アルペジオ）奏法の前段階として活用した。親指の演奏の際には、右手親指を第二関節から動かすべきだが、親指と手全体を使って弦を演奏するケースが散見された。親指だけで単音を演奏するのであればそのような奏法でも演奏は可能だが、多声音楽や和音を演奏する場合、右手各指を使って演奏する必要があるため、右手の形が、親指で演奏する時も im で演奏する際と同じになるよう、繰り返し説明を行い、その後一人一人のフォームを確認し、必要な場合は修正を行った。

その後、図4に記した楽譜を用い、和音の奏法について説明を行った。和音の導入にあたって、ポップス分野で使われるタブ譜を用意し、読み方を説明した。エレキギター、アコースティックギターではタブ譜が用いられ、五線が読めなくても読譜ができることから、複雑な和音の運指を示す際には有効だと考えていたが、実際の講義中には、タブ譜の数字と左手指番号とを混同してしまう学生が続出し、混乱してしまう場面があった。新たな技術の習得と、タブ譜の読譜法の習得が重なってしまったうえに、左手の運指表記に関しても定着が十分ではなかったため、この時点でのタブ譜導入は予想していたような効果はあがらず、むしろ不適切であった。2番目以降のグループにはその点を注意して説明を行った。

図4の楽譜最上段、最初の3和音は、一般的なコード演奏の際に用いる和音の押さえ方で、これらが初心者にとって複雑であることから、ギターは難しい楽器であるという印象をもたらしている側面がある。実際に、正確に押弦できる学生はほぼ皆無であった。その難しさを一度体験してから、次の3小節に記された、簡易化された和音に取り組んだ。こちらは問題なく演奏できる学生がほとんどであった。

引き続き、和音の奏法として右手 pim の3指のみに絞ったアルペジオ奏法の導入を行った。エクササイズ¹、²では、ト長調のトニック、ドミナント、サブドミナントの和音を習得し、簡易的な伴奏ができることを目指した。

アルペジオに用いるアルアイレ奏法と、最初に習得したアポヤンド奏法の区別を二回の講義で徹底することが難しかった。これはスペイン語に馴染みのない日本人学習者である以上仕方のないことである。よりわかりやすい名称を便宜的に用いるなど、改善策を今後見出したい。

技術的には、この回においても大きく遅れをとる学生はおらず、余裕のあるグループでは、第三回で取り組む《ふるさと》のメロディーを先取りして練習した。この《ふるさと》は試験課題の一つである。

図4 第二回配布課題 和音のエクササイズ

① アルペジオの練習2

② アルペジオの練習2

4-3 第三回

前回の復習を行い、特にテストの課題となるハ長調のスケールに関して重点的に振り返りを行った。その後、一人一人、クラス全員の前でスケールを弾く練習を行った。無伴奏で独奏する楽器は少なく、その中でも聴衆の正面に座って構えるクラシックギターは、独特の視線で演奏を行うため、試験に先立って体験する機会を設けた。その後、もう一つの課題となる《ふるさと》の楽譜(図4)を配布した。《ふるさと》

は老若男女が知る唱歌であり、親しみが持ちやすいこと、開放弦を用いた和音を演奏しやすいト長調で、メロディーも第一ポジションで演奏できることから選択した。学生はメロディに八分音符が頻出する9~12小節に関しては伴奏のパートを、それ以外はメロディを担当し、筆者が主に伴奏パートと9~12小節のメロディを担当した。

9~12小節の伴奏部分では、サブドミナントの和音に展開形を用いることで開放弦であるG音をペダルとして用いることで、第二回の際に

学んだアルペジオよりもやや難易度を下げ、流れのなかでミスが起こる可能性を極力排除した。全員と一度ずつ通しで合わせ、最後にクラス全体と一緒に演奏を行った。

二重奏形式で《ふるさと》を演奏することは、多くの学生にとって手応えを感じる事が伺い

しれた。この点でも達成感を重視した教育方針は成功していたと言えるが、この段階では、弦楽器奏者である学生の中に、課題が簡単であることにやや物足りなさを感じている様子も見られた。

図 5 第 3 回配布 《ふるさと》（試験課題、橋爪編）

ふるさと

岡野貞一

4-4 第四回

この回では試験として、ハ長調のスケール（図 3 エクササイズ **7**、**8**）と《ふるさと》の演奏を一人ずつ行う。試験を始める前に練習の時間を取り、全員と一度ずつ《ふるさと》のリハーサルを行った。その間、ほかの学生は自主練習を行った。その後、最初の試験として、ハ

長調のスケール二種を一人ずつ演奏し、続いて全員で《ふるさと》を合奏形式で通したあと、再び一人ずつ《ふるさと》の試験を実施した。試験の演奏は、一人一人が教室の前部で行い、他のクラスメイトは観客となる形で行った。

試験の結果として、ハ長調のスケールに関しては、たどたどしい学生も数名いたが、概ね全

員問題なく演奏することができた。リズムよく演奏できるように、単純なスケールの上下ではなく、フレーズ風のバッセージ(図3 エクササイズ8、9)を課題としたが、特に高音域のほうは最後の一小節にひっかけのようにD音が加えられているので、多くの学生がこの音を弾くことを忘れてしまっていた。エクササイズに改善の余地があるため、評価には反映しなかった。

《ふるさと》に関しては、無理なく演奏でき、音楽的な演奏に取り組めるテンポ感を一人一人聞き出し、希望通りのテンポで伴奏を行うように心がけた。音符通りに演奏することに精一杯な学生もいたが、しっかりと音楽的な表現に到達している学生も多くみられた。何度も止まって演奏が破綻するような例はなく、講師とのアンサンブルも問題なくこなせていた。

すべての学生に対し、合格点以上の評価をつけることができる結果となった。

5. 講義における達成感を重視した取り組み

講義の実践において重要視した点として、学生に対し、出来ている、課題を講師の想定通り(もしくはそれ以上のスピードで)こなせているという声かけを、クラス全体と個々の学生に対し、頻繁に行うことで、出来ない、難しいというネガティブな発想を持ちにくくする環境づくりを心がけた。どれだけシンプルな課題でも、最初に達成する際にはかならず褒め、その中で特に優れている点を探し、声かけを行った。また少し困難な場面を迎えている学生には、時間をかけてゆっくりと練習することを促し、時には時間をかけて一緒に取り組み、改善方法を伝えながら、成功するのを見届けるように留意するなど、可能な限り全体に対する説明に止まらず、一対一でのこまめな対応を心がけた。反面、弦楽器の演奏経験がある学生などは退屈な時間を過ごしている場面もあり、進度が早く、深く学ぶ意欲がある学生のために自習課題を準備する必要性などを感じることもあった。また、最終回である4回目の講義の後には、無事に試験

に合格したことは、すでにギター演奏が出来るようになっていることであると強調して伝え、音楽教員となった際に生徒に教授する際に、なるべくポジティブに取り組めるようになることを意識しながら声かけを行った。

講義の最後の仕上げとして、試験が終了しリラックスした段階で、輪唱であるフランス民謡《フレール・ジャック》の譜読みを行ったあと、クラスを数グループに分けた輪唱(演奏)を行った。おおよそ問題なく弾けるようになった段階で、一人ずつ順番に輪唱し、講師が1番最後を担当する形で、全員での合奏を体験して履修の完了とした。

そのほか、本学ではスケールが630mmの小さい楽器のほか、ボディ自体も小さいアリアの19世紀ギター型の楽器も学生用に所蔵しており、手が小さいことで演奏に困難を覚える学生数名にこれらの利用を促した。一般的に教育現場にはこういった楽器の用意がないことがほとんどであるため、特に問題がない、ほかの学生は一般的な650mmのスケールの楽器で実習を行った。

6. アンケートについて

各グループ最終講義で、前任者が行っていたアンケートを流用し、受講者に記入を依頼した。学生33名全員からの回答を得た。講義の満足度を4段階で評価する(数字が少ないほど高い満足度)項目では、25名は1、8名が2を選択し、概ね高い満足度が得られた。

ギターのイメージを問う項目については、履修前や始めたばかりの時点では難しいイメージであったが、講義を受講するにつれ、徐々に弾くことが出来るようになったという実感を持ったという感想が多数見られた。またギターはコード弾きなど、伴奏をする楽器だと思っていたが、単音で演奏することに驚いたという意見も多く見られ、独奏楽器であるクラシックギターの知名度が若い世代では低いことに由来しているように見受けられた。

その他、感想を自由に回答する項目では、数

名が、褒められたことや、個別に時間をかけて教えられたことを良かった点にあげており、グループレッスンであっても個別に進捗を確認しながら、上達している点をあげて褒めることがモチベーションの維持に繋がっているということを確認した。加えて、講義の最後に行った《フレール・ジャック》についても好意的な意見が散見され、合奏のようにみんなで楽しむ時間を作ることが、全体のモチベーションを維持することにつながることも確認できた。

筆者が講義の際に最も重要視していた、達成感を感じさせる講義の実践については、ある程度の成果を上げることができた。反面、左手の小指を使った押弦や、右手の a（薬指）を使った奏法など、初歩的な技術でありながら習得に時間がかかるものは省くなど、技術の取捨選択を行う必要があったため、長期的な目線で見るとギター教授法としては不十分な部分もあったため、今後は短期間の学びに、より総合的な技術習得を詰め込む方法論について研究を行う必要性を感じた。

7. おわりに

本論では、クラシックギターの初学者に対し、小さな課題を多重に設定し、成功体験を積み重ね、達成感を得やすい形で学ぶことで、短期間でギターに対する愛着を抱きながら、基礎的な演奏技術を身につける教育実践活動について述べた。

筆者が本講義を担当するまで、ギター演奏に関しては、個人レッスン形式や室内楽グループへの指導経験しかなかったが、過去に語学教育企業の派遣講師として、英会話や資格試験の講義に関する研修を受けた上で、様々な大学の英語関係講義や、一般企業での英語研修を担当した経験があったため、その際に得たノウハウや知見を流用し、個人レッスンでの経験と組み合わせ、達成度を重要視した講義を構築するに至った。

課題制作に至っては、作曲家としてこれまでギター作品や、特に上級者向けギターエチュー

ドを作曲した経験を活用し、バルトーク・ベラ Bartók Béla (1881-1946) の、《ミクロコスモス Mikrokosmos》を参考としている。

本実践で得られた反省点を元に、本論掲載の楽譜を一部修正したものを、青山社 音楽表現は体でわかる！『音楽表現はからだで変わる！よくわかる からだの正しい使い方レッスン』（2023）の第 8 章「器楽の基礎②ギター編」に記した。

グループレッスンでギターを教授する方法に関する研究は未だ少なく、今後とも研究が必要な分野であると考えられる。他分野のグループレッスンの手法や、そのモチベーション維持のための取り組みを研究しながら、今後も器楽基礎 I の講義改善や、初学者向けの教材の制作や教育方法の研究に取り組んでいく。

文献

- Pujol, Emilio. 1980. *Escuela razonada de la guitarra libro segundo*. Buenos Aires, Ricordi Americana.
- Coelho, Victor Anand ed., 2005. *Performance on lute, guitar, and vihuela: historical practice and modern interpretation*. Cambridge: Cambridge university press.
- Yates, Stanelly. 2016. *Classical Guitar Technique from Foundation to Virtuosity: A comprehensive guide part 1 foundation*. Scotts Valley: CreateSpace Independent Publishing Platform.
- Carcassi, Mateo. 2005. 『改訂新版 カルカッシ・ギター教則本』 溝淵浩五郎編 東京：全音楽譜出版社
- 小原光一 2021 『中学生の器楽』 東京：教育芸術社
- Bartok, Bela. *Mikrokosmos I*. 1940. London: Boosey & Hawk.
- 西田治 2009 『苦手意識を抱かせない器楽導入指導の在り方 - 離島小規模小学校における実践を通して.』 長崎大学教育学部附属教育

- 実践総合センター紀要 8 (2009): 133-146.
飯野なみ, 福田賢一郎, 西村悟史, 西村拓一 20
17 『音楽指導支援のための演奏法の目的
指向知識の構築』 研究報告音楽情報科学
(MUS) 2017-MUS-115, no. 42: 1-5
河内勇, 河内知子 2020 『「音楽表現の知識と技
能Ⅲ（器楽）」の授業改善の試み－管弦楽器
の基礎的な技能に関して－』 兵庫教育大学
研究紀要 57: 45-52.

謝辞／付記

「器楽基礎Ⅰ」主担当で、講義にあたり様々な面でサポートしていただいた土居知子教授と、クラシックギターの前担当者の佐々木滋隆元非常勤講師には、大変多くのアドバイスを賜りました。また本講義の大枠は佐々木講師の講義を参考にしたものです。両先生に対し、深謝の意を表します。